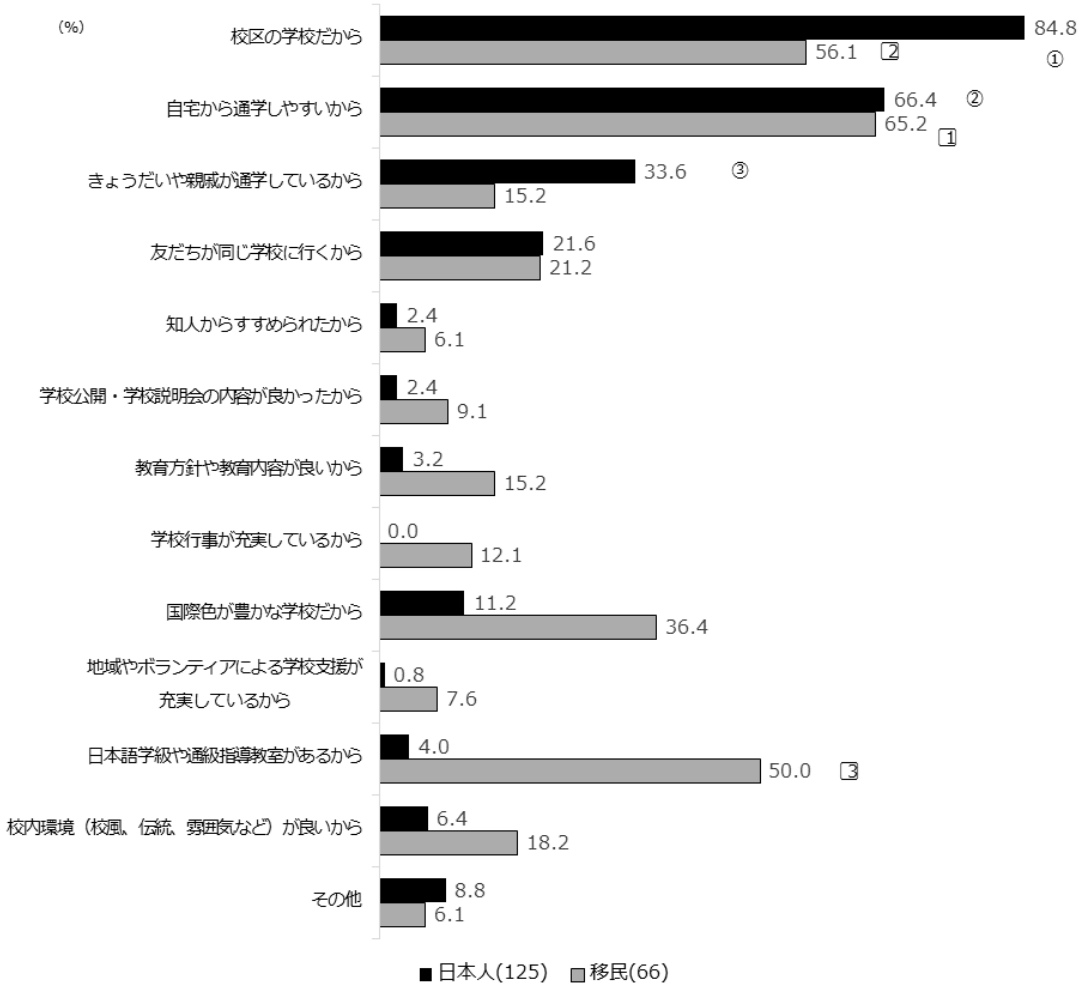
3. 保護者票（全学年）

3.1　学校選択理由

区では学校選択制を実施しており、A 小学校でも 2 割強の保護者が入学前にほかの学校の情報収集や入学の検討をしている（日本人 29.6%、移民 22.7%、図表割愛）。子どもと保護者がどのような理由で A 小学校を選択したのか、複数回答でたずねた（図表 3-1）。

日本人では「校区の学校だから」84.8%、「自宅から通学しやすいから」66.4%、「きょうだいや親戚が通学しているから」33.6%の順に多く、地元の小学校であるために選ばれている様子がうかがえる。「その他」の具体的な記述でも、家族の母校だからという回答が複数みられた。一方で移民では、「自宅から通学しやすいから」65.2%、「校区の学校だから」56.1%に「日本語学級や通級指導教室があるから」50.0%や「国際色が豊かな学校だから」36.4%が続く。そのほかにも「教育方針や教育内容が良いから」（日本人 3.2%＜移民 15.2%）、「校内環境が良いから」（日本人 6.4%＜移民 18.2%）などでも差がみられ、移民のほうが A 小学校の具体的な特徴を選択理由にあげる傾向がみられる。

図表 3-1　学校選択理由



注1）複数回答。
注2）日本人・移民それぞれ上位 3 項目に、1～3 の番号を付している。
注3）通級指導教室については、質問紙では A 小学校の具体的な名称を入れてたずねている。

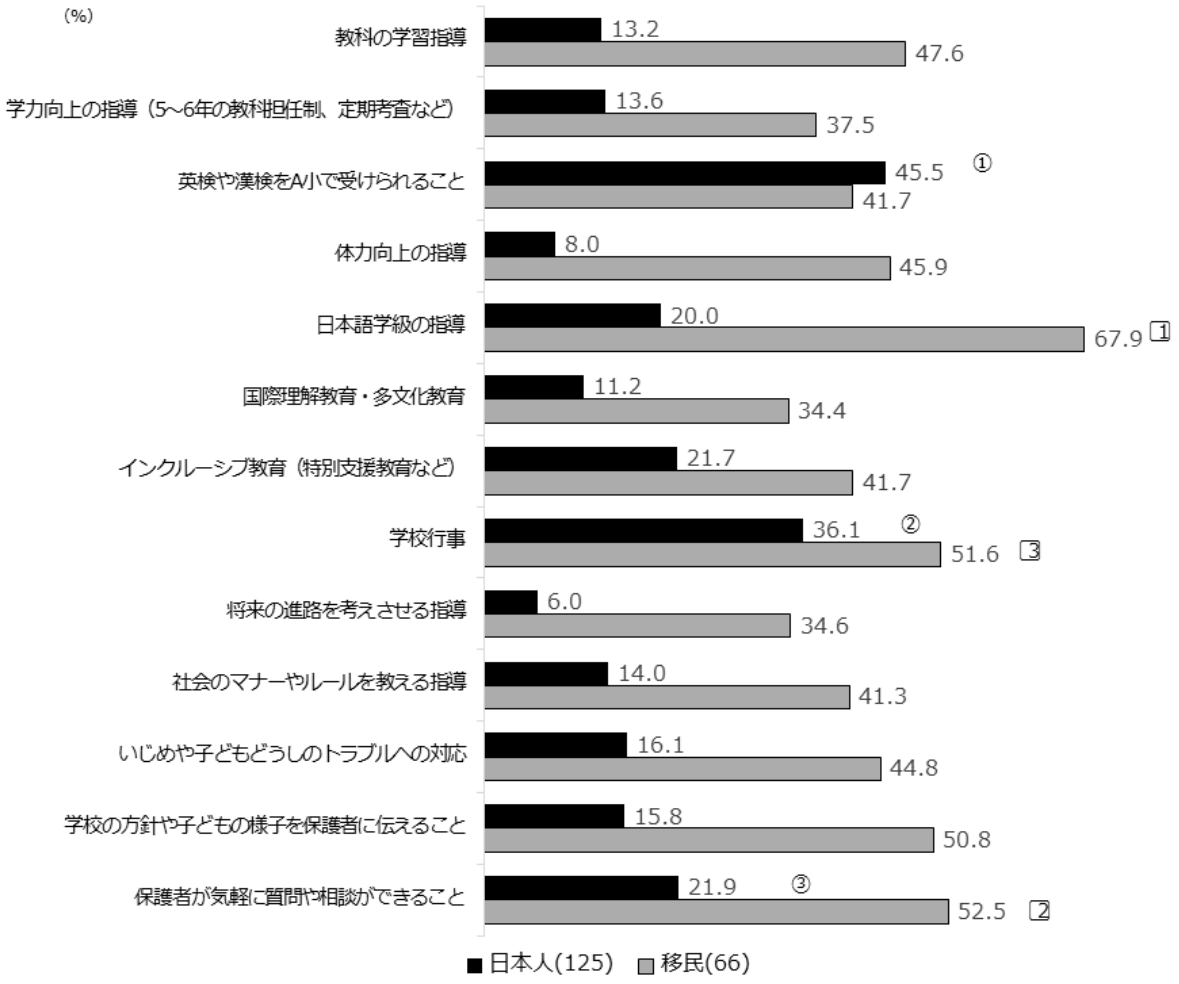
3.2　学校満足度

学校のさまざまな取り組みに対して、どの程度満足しているのかをたずねた（図表 3-2）。なお、学年によっては「わからない・受けていない」と回答する割合が高い項目がみられたため、本項ではすべての項目で「わからない・受けていない」を除外した上で「とても満足している」の割合を算出した。

日本人では「英検や漢検を A 小で受けられること」45.5%、「学校行事」36.1%、「保護者が気軽に質問や相談ができること」21.9%の順に高い。移民では「日本語学級の指導」67.9%、「保護者が気軽に質問や相談ができること」52.5%、「学校行事」51.6%と続き、特に日本語学級に対する満足度は非常に高い様子がうかがえる。全体的に移民のほうが「とても満足している」の割合は高い。

日本人の回答をみると、「体力向上の指導」8.0%と「将来の進路を考えさせる指導」6.0%は 1 割を下回る。両者は「まあ満足している」を足し合わせると 7 割程度になるが、ほかの項目に比べると低く、今後の課題のひとつと捉えられる。

図表 3-2　学校満足度

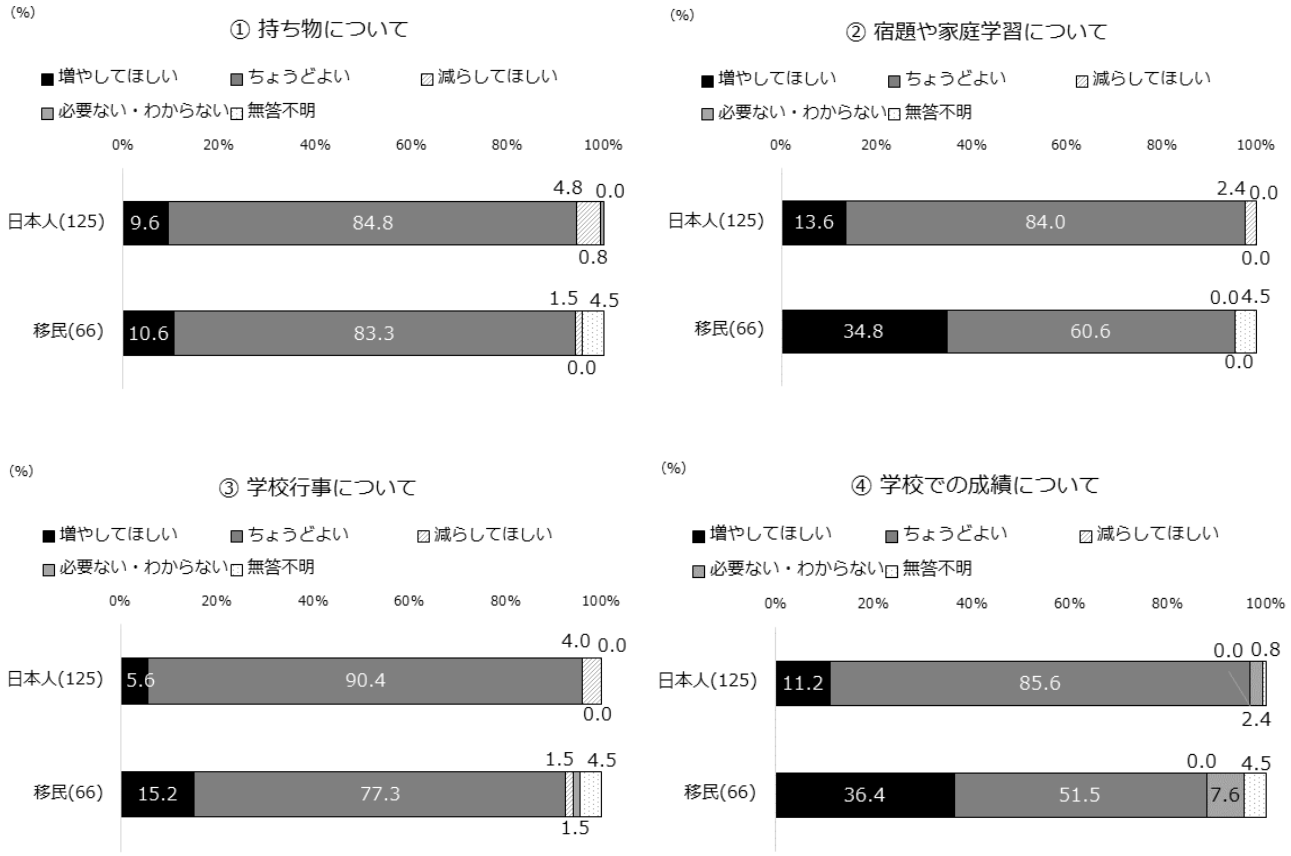


注 1）「とても満足している」の%。
注 2）各項目「わからない・受けていない」と回答したケースを除外して集計している。
注 3）日本人・移民それぞれ上位 3 項目に、1～3 の番号を付している。
注 4）「国際理解教育・多文化教育」「学校行事」については、質問紙では A 小学校で使用されている具体的な名称でたずねている。

3.3　学校からの連絡

学校から保護者への連絡回数について、保護者の希望をたずねた（図表 3-3-1）。いずれの項目においても「減らしてほしい」「必要ない・わからない」は 1 割未満と少数で、「ちょうどよい」が最も多い結果となった。「増やしてほしい」の割合はいずれの項目でも日本人より移民のほうが高い。特に差が大きかったのは「宿題や家庭学習について」（日本人 13.6%＜移民 34.8%）と、「学校での成績について」（日本人 11.2%＜移民 36.4%）で、20 ポイント強の差がみられる。移民の保護者がより、学校からの連絡に対する希望や学習・成績への関心の高い様子がうかがえる。

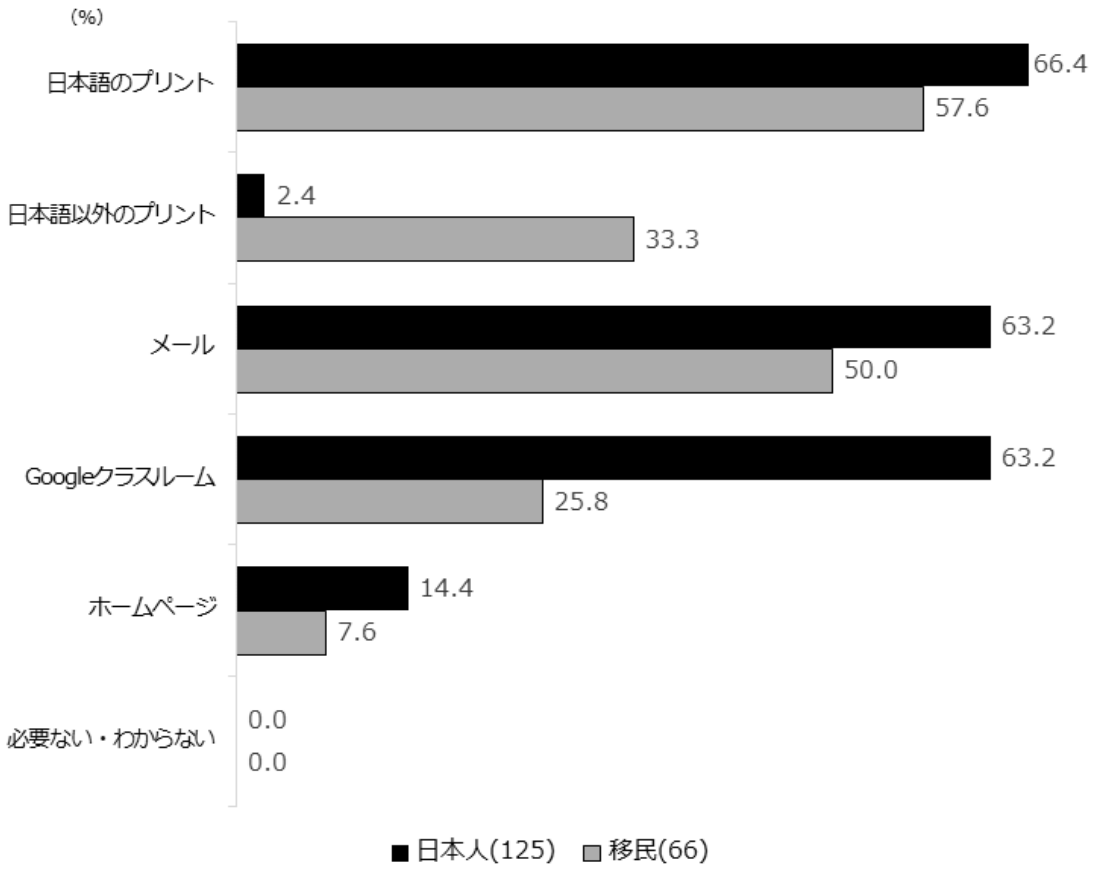
図表 3-3-1　学校からの連絡回数



学校からの連絡手段についても、保護者の希望をたずねた（図表 3-3-2）。項目には実際に A 小学校で使用可能な手段を取り入れ、複数回答の設問としている。日本人では「日本語のプリント」66.4%、「メール」63.2%、「Google クラスルーム」63.2%の 3 つがほぼ同率で高い数値となった。移民では「日本語のプリント」57.6%、「メール」50.0%を半数以上の保護者が希望し、次いで「日本語以外のプリント」33.3%が高かった。

調査設計時には、メールや Google クラスルームなどの IT を用いた連絡手段を希望する移民の保護者が多いと予想していたが、調査結果では 3 分の 1 が「日本語以外のプリント」を希望していた。移民の保護者の習慣や使用言語は多様であり、日本語のプリントが子どもから親に渡らないケース、渡っても親が読めないケースなども考えられる。保護者の実態にあわせた学校からの連絡手段の工夫、また、それを可能にする通訳や翻訳アプリを行政や民間が支援することが求められる。

図表 3-3-2 学校からの連絡手段



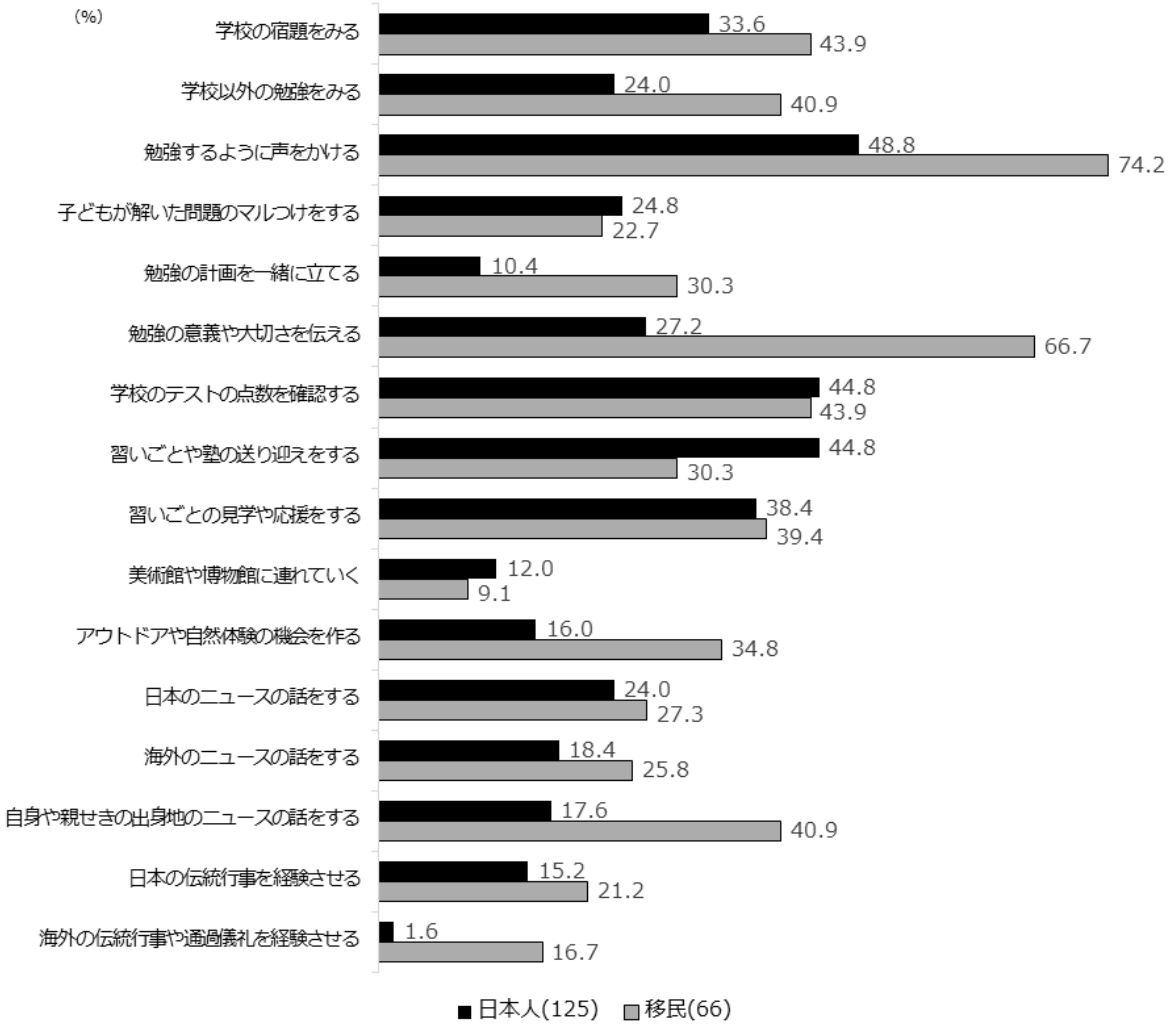
注）複数回答。

3.4　教育戦略

保護者が子どもの勉強などに対してどのくらい関わっているのかをたずねた（図表 3-4）。全体的に移民のほうが数値の高い項目が目立ち、普段の勉強については「学校の宿題をみる」「学校以外の勉強をみる」「勉強するように声をかける」「勉強の計画を一緒に立てる」「勉強の意義や大切さを伝える」の 5 項目で、日本人を 10 ポイントから 40 ポイント程度上回っている。特に「勉強するように声をかける」「勉強の意義や大切さを伝える」は 7 割前後に達し、「よくする」の割合としては非常に高い。保護者の教育熱心さは移民の特徴として指摘されるところだが、本調査においても同様の傾向がみてとれる。

そのほかの項目についてみると、「アウトドアや自然体験の機会を作る」「自身や親せきの出身地のニュースの話をする」「海外の伝統行事や通過儀礼を経験させる」の 3 項目で、移民が日本人の数値を 10 ポイント以上上回る。また、「日本のニュースの話をする」や「日本の伝統行事を経験させる」では、日本人と移民はほぼ同程度の関わりをしている結果となった。学業達成や地位達成の志向、出身国の文化の伝達や日本の文化の習得など、さまざまな角度から子どもに熱心に関わる移民保護者の姿が浮かび上がる。

図表 3-4　教育戦略



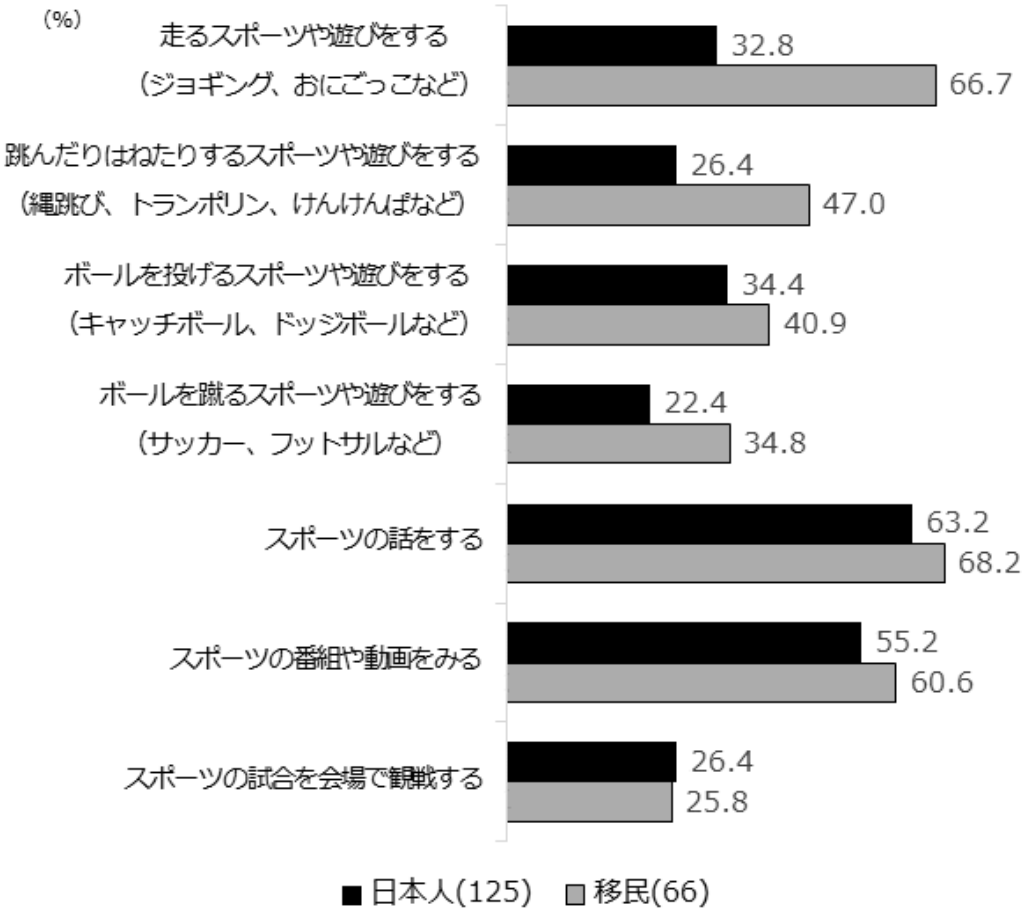
注）「よくする」の％。

3.5　子どもとのスポーツ・運動遊び

子どもと一緒に取り組むスポーツや運動遊びについて、する・話す・みるの観点から 7 項目にわけて頻度をたずね、「よくする」と「ときどきする」の合計値を示した（図表 3-5）。するスポーツについては、「走るスポーツや遊びをする」（日本人 32.8%＜移民 66.7%、以下同）「跳んだりはねたりするスポーツや遊びをする」（26.4%＜47.0%）「ボールを投げるスポーツや遊びをする」（34.4%＜40.9%）「ボールを蹴るスポーツや遊びをする」（22.4%＜34.8%）の 4 項目いずれも移民のほうが高く、特に「走るスポーツや遊びをする」では日本人を 30 ポイント以上上回る。

一方で、話す・みるに関しては、「スポーツの話をする」（63.2%＜68.2%）「スポーツの番組や動画をみる」（55.2%＜60.6%）では移民のほうが若干高く、「スポーツの試合を会場で観戦する」（26.4%、25.8%）は同程度で、顕著な差はみられなかった。

図表 3-5　子どもとのスポーツ・運動遊び

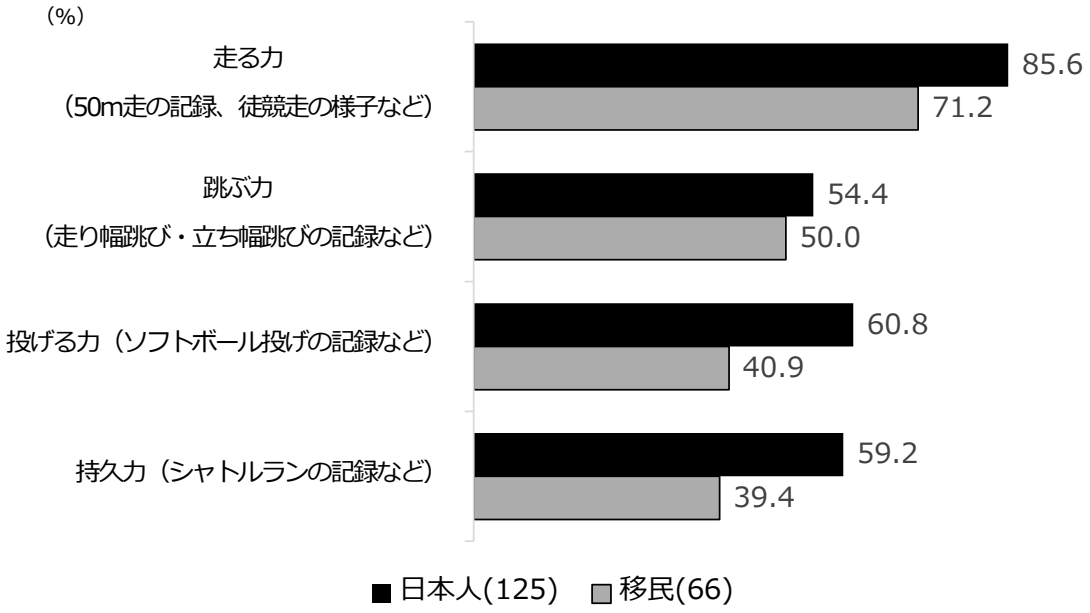


注）「よくする」＋「ときどきする」の%。

3.6　子どもの運動能力の認知

子どもの運動能力についてどのくらい知っているかをたずね、「よく知っている」と「だいたい知っている」の合計値を示した（図表 3-6）。「走る力」は日本人 85.6%、移民 71.2%と、差はあるもののいずれも多くの保護者が認知している結果であった。「跳ぶ力」は日本人 54.4%、移民 50.0%で、ともに半数程度が把握していた。「投げる力」「持久力」の認知度は、日本人が 6 割程度であるのに対して移民では約 4 割と、差がみられた。4 項目いずれも日本人のほうが知っている割合は高く、移民の保護者における体力テストの指標の馴染みのなさや、日本語の資料の難しさなどが背景にあると推察される。

図表 3-6　子どもの運動能力の認知

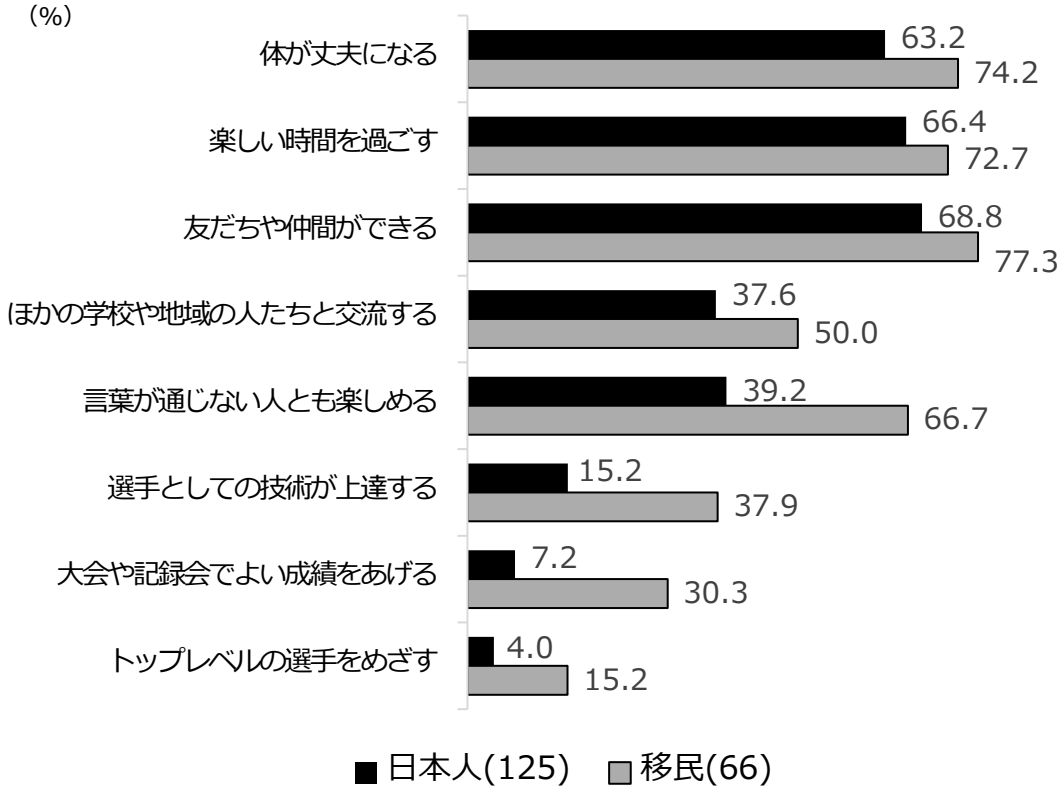


注）「よく知っている」＋「だいたい知っている」の%。

3.7　子どものスポーツへの期待

子どもの運動やスポーツについて、保護者がどのような期待をしているのかをたずねた（図表 3-7）。日本人・移民ともに「体が丈夫になる」「楽しい時間を過ごす」「友だちや仲間ができる」の割合が高く、6～7割台に達した。この 3 項目を含め、すべての項目で移民の保護者の数値が高く、子どものスポーツにさまざまな期待をしている。特に差が大きかったのは「言葉が通じない人とも楽しめる」（日本人 39.2%＜移民 66.7%、27.5 ポイント差、以下同）、「選手としての技術が上達する」（15.2%＜37.9%、22.7 ポイント差）、「大会や記録会でよい成績をあげる」（7.2%＜30.3%、23.1 ポイント差）であった。児童にたずねたスポーツの価値の項目（2 章 15 節参照）では、日本人に比べて移民の評価が低い項目も散見されたが、保護者においては対照的に移民の期待が高い結果となった。

図表 3-7　子どものスポーツへの期待



注）「とても期待する」の%。

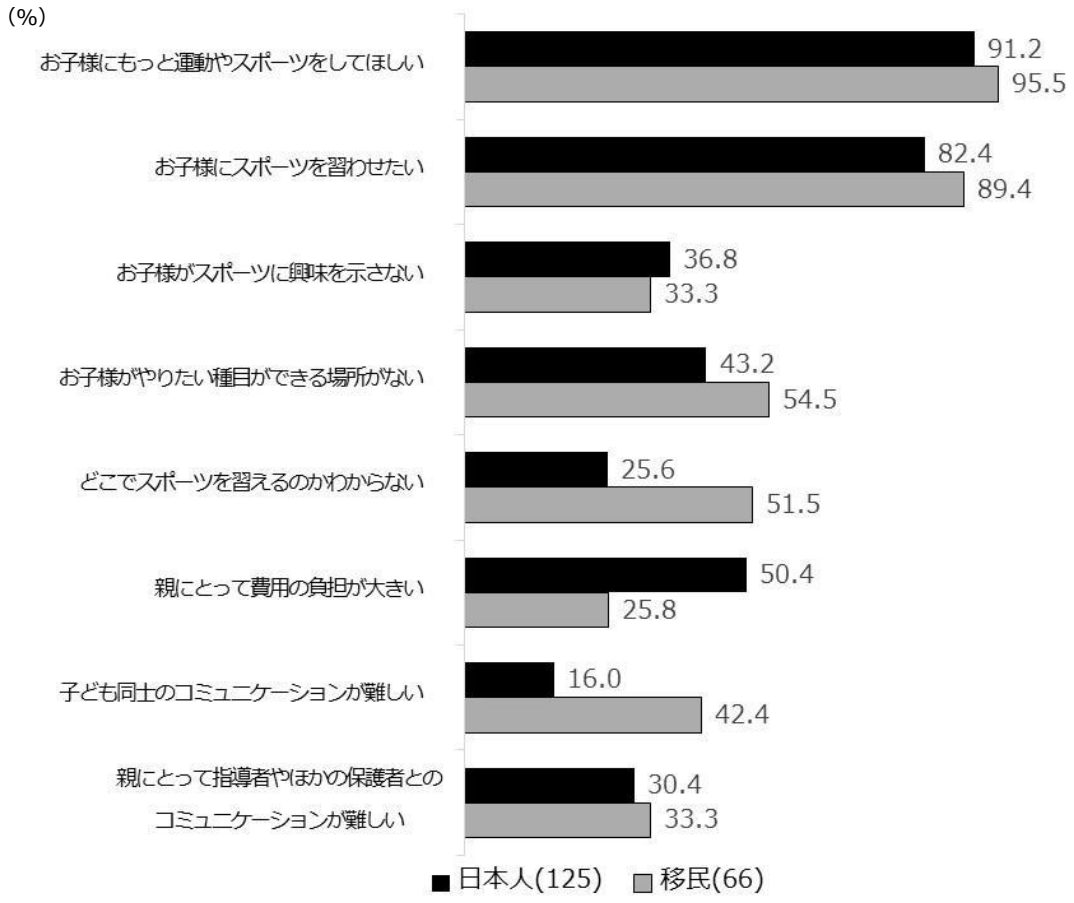
3.8　子どものスポーツに関する悩み

子どものスポーツに関する悩みをたずねた（図表 3-8）。日本人・移民ともに「お子様にもっと運動やスポーツをしてほしい」「お子様にスポーツを習わせたい」が 8 割から 9 割強に達した一方で、「お子様がスポーツに興味を示さない」はいずれも 3 割強であった。出身国の背景にかかわらず、多くの保護者が子どもにスポーツをしてほしいと願うものの、子どもが関心を示さない状況を悩ましく思う様子がうかがえる。

スポーツのできる環境についてたずねた「お子様がやりたい種目ができる場所がない」「どこでスポーツを習えるのかわからない」では移民の割合が高く、5 割に達している。自由記述では、日本人・移民を問わず「遊べる場所がない」「特定のスポーツや遊びをどこでできるのかわからない」という回答が多くみられた。加えて移民の保護者からは「子ども向けの水泳レッスンがどこにあるのかわからない」という意見も複数寄せられた。

また、「親にとって費用の負担が大きい」は日本人 50.4%＞移民 25.8%と、日本人のほうが高い割合を示した。家庭の経済状況に加え、具体的な費用の検討状況や情報の入手の度合いも関係していると推察される。親子のコミュニケーションに関しては、日本人では「子ども同士のコミュニケーション」よりも「親にとってのコミュニケーション」が難しいと回答する割合が高かったのに対して、移民では「子ども同士のコミュニケーションが難しい」と答える割合が高かった。

図表 3-8　子どものスポーツに関する悩み

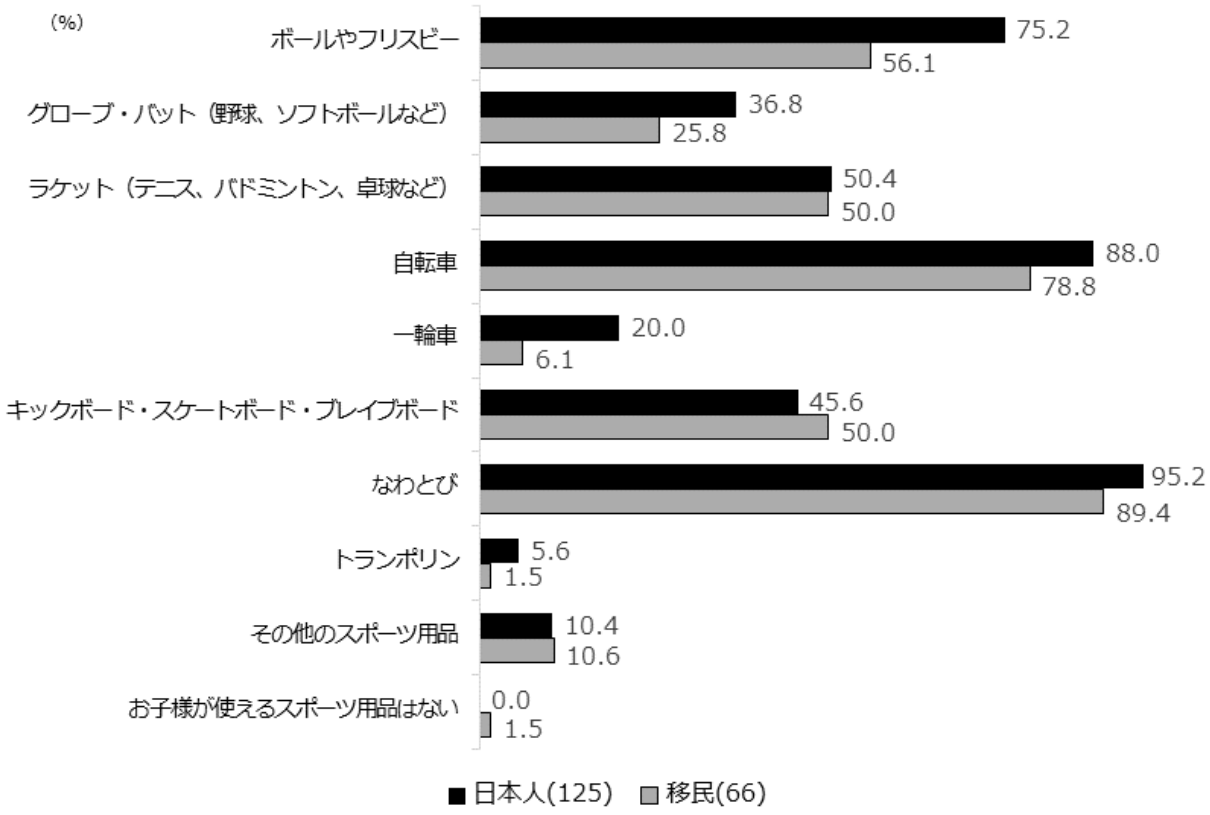


注）「とてもそう思う」＋「まあそう思う」の%。

3.9　家庭にあるスポーツ用品

自宅にある、子どもが使えるスポーツ用品についてたずねた（図表 3-9）。日本人・移民ともに「なわとび」が 9 割前後、「自転車」が 8 割前後と、多くの家庭で子どもたちが使用できる状態にある。「ボールやフリスビー」（日本人 75.2%＞移民 56.1%、以下同）、「グローブ・バット」（36.8%＞25.8%）、「一輪車」（20.0%＞6.1%）は、日本人家庭の所有率が高い。「その他のスポーツ用品」には、フラフープやウィンタースポーツ用品などがあげられた。「お子様が使えるスポーツ用品はない」を選択した割合はごくわずかであった。

図表 3-9　家庭にあるスポーツ用品



注 1）複数回答。
注 2）トランポリンは「その他のスポーツ用品」の具体的な回答から抽出した。

3.10　好きな運動・スポーツ

保護者に「するのが好きな運動やスポーツ」「見るのが好きな運動やスポーツ」を自由記述で回答してもらった。それぞれ該当する種目がある場合にはひとつずつ記入するように指示したが、複数の種目を記入するほか、無記入や「なし」という回答もみられた。複数回答はすべて集計に含め、上位 3 つをランキング形式でまとめたのが図表 3-10 である。

「するのが好きな運動やスポーツ」については、日本人の保護者 60 名、移民の保護者 48 名が具体的に記入していた。日本人では「バレーボール」が 10 名と最も多く、「バドミントン」8 名、「野球」「水泳」「スキー」がそれぞれ 5 名であった。移民では「サッカー」9 名が 1 位で、「バドミントン」6 名、「水泳」5 名と続く。日本人の「バレーボール」に関しては、PTA が主催するバレーボール活動への参加者が含まれていると推察される。移民で「サッカー」が上位にあがった点については、保護者票の回答者に父親が多い（日本人 10.4%＜移民 34.8%）点も影響したと考えられる。

「見るのが好きな運動やスポーツ」については、日本人の保護者 73 名、移民の保護者 51 名が具体的に回答した。日本人では「サッカー」「野球」がそれぞれ 15 名と最多で、「バレーボール」14 名が続いた。移民では「サッカー」15 名が特に多く、「バスケットボール」7 名、「水泳」5 名があげられた。児童の回答（2 章 9 節参照）と同様、日本人では野球の人気が高い点が特徴である。

図表 3-10　好きな運動・スポーツ

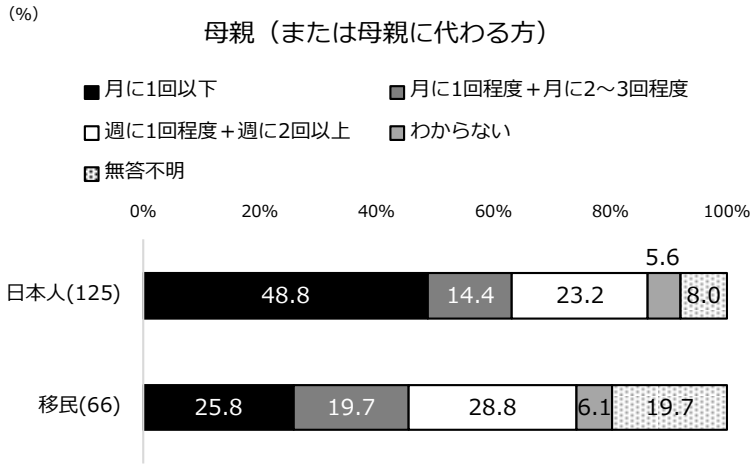
	するのが好きな運動やスポーツ			見るのが好きな運動やスポーツ		
	順位	種目	回答数	順位	種目	回答数
日本人	1	バレーボール	10	1	サッカー	15
	2	バドミントン	8	1	野球	15
	3	野球	5	3	バレーボール	14
	3	水泳	5			
	3	スキー	5			
移民	1	サッカー	9	1	サッカー	15
	2	バドミントン	6	2	バスケットボール	7
	3	水泳	5	3	水泳	5

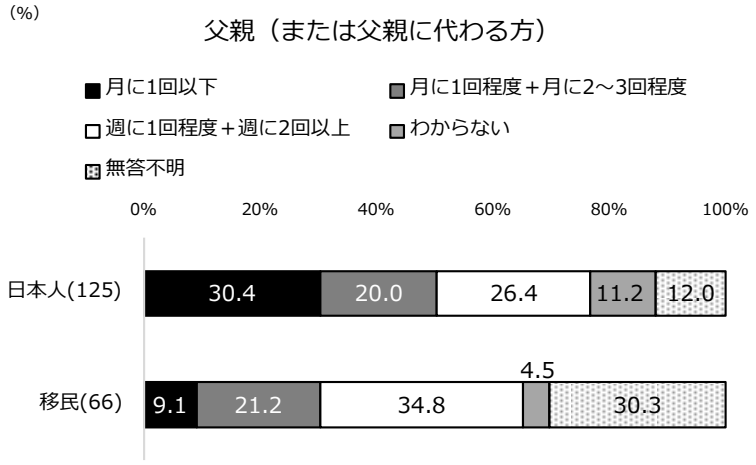
3.11　保護者のスポーツ実施頻度

保護者が普段、1 回あたり 30 分以上の運動やスポーツをどのくらい実施しているかをたずねた（図表 3-11）。なお、ひとり親や別居などで該当する人がいない場合には無記入にしてもらったため、無回答率がほかの質問項目に比べて高い。

母親の結果をみると、日本人は「月に 1 回以下」が 48.8%と最多で、「週に 1 回程度」と「週に 2 回以上」を合わせた 23.2%が続き、半数近くがほとんど運動・スポーツを実施していないことがわかる。移民では「月に 1 回以下」が 25.8%で、運動・スポーツをほとんど実施していない母親は 4 分の 1 程度にとどまる。なお、「無答不明」を除外して集計しても同様の傾向がみられ、日本人のほうが「月に 1 回以下」が 20 ポイント以上高かった（図表割愛）。

父親も同様で、日本人では「月に 1 回以下」30.4%、「週に 1 回程度」と「週に 2 回以上」を合わせた 26.4%と続くが、移民では「週に 1 回程度＋週に 2 回以上」34.8%、「月に 1 回程度＋月に 2～3 回程度」21.2%の順で、「月に 1 回以下」は 9.1%にとどまる。父親の集計においても、「無答不明」を除外した場合でも「月に 1 回以下」は日本人のほうが 20 ポイント以上高い。日本人の保護者の運動・スポーツ実施頻度の低さが浮き彫りになる結果であった。





コラム② 保護者面談

多くの小学校では、担任教師と保護者の面談が行われている。A 小学校も例外ではない。ただし、児童以上に日本語での会話が難しい保護者が多く、通訳を交えた「三者面談」になるケースが少なくない。通常の保護者面談であれば、各家庭と担任との間で予定を調整するが、A 小学校では通訳も含めた三者間でスケジュールを調整する必要があり、その過程はより複雑になる。特に、通訳の必要な保護者が多い中国語の場合、通訳の方が 1 日に複数の面談に同行することもある。さらに、保護者の中にはお知らせの内容が十分に伝わっていなかったり、出身国に保護者面談がなかったりするため、時間になっても学校に来ない場合もある。その際は、再びスケジュールを調整する必要がある。

保護者面談は、移民の家庭にとっても、学校にとっても、通訳を介するとはいえ直接コミュニケーションを取れる貴重な機会である。一方で、その予定調整ひとつをとっても、移民の少ない学校では発生しない多くの業務を抱えているのも事実である。